

「病気のいやし」

2014年08月31日

マルコによる福音書6章53節～56節。こうして、一行は湖を渡り、ゲネサレトという土地に着いて舟をつないだ。一行が舟から上がると、すぐに人々はイエスと知って、その地方をくまなく走り回り、どこでもイエスがおられると聞けば、そこへ病人を床に乗せて運び始めた。村でも町でも里でも、イエスが入って行かれると、病人を広場に置き、せめてその服のすそにでも触れさせてほしいと願った。触れた者は皆いやされた。

主イエスの宣教団はゲネサレトに着き、舟から上がった。すると、主イエスが来られたという噂はすぐに広まり、町、村、里から、人々は病人たちを大勢、床に乗せて運び込んで、広場に置いた。病人たちはいやしを求め、主イエスの服の裾にでも触れさせてほしいと願い、触れた者は皆いやされた。病人とその家族、友人たちの必死の願いが、主イエスによって顧みられたという出来事が記されている。広場は喜びの声で沸き返っただろう。主イエスの服の裾に触れていやされたとある。12年間、出血の止まらなかった女性が、後ろから、主イエスの服に触れいやされたドラマチックな出来事が前にも記されていた。使徒言行録5章15節～16節に「ペトロが通りかかるとき、せめてその影だけでも病人のだけかにかかるとした。また、エルサレム付近の町からも、群衆が病人や汚れた霊に悩まされている人々を連れて集まって来たが、一人残らずいやしてもらった」と、ペトロの影によってさえ、いやされたと書いている。ゲネサレトでは、主イエスによって、神の恵みが見える形で現されたことを、苦しむ民衆は体験し喜び合った。マルコ福音書の記者は、主イエスは病気をいやす権能を持つ神の子であると告白している。

病気は体が痛むことで、それだけでも耐え難い。そして、病気は「気を病む」と書くが、精神的にも落ち込む。更に、看病する家族の負担も大きい。病気で死に至る時、悲しみは頂点に達する。しかし、誰もが病気を避けることはできない。病気はオーバーヒートを知らせ、休めとの信号で、恵みとも言える。また、病気から多くを学び、成長させられることも事実である。

私は三つの病気を経験した。① うつ病。高校三年生の時、自殺未遂をした。牧師になって1年後くらいから、体調を壊し、うつ病と診断された。入院、転地療養など、5～6年、投薬を受けた。この間の不安と苦悩は深く、私の信仰と人生観を変えた。うつ病の経験は牧師として、大きな益になったと感謝している。② 食道癌と胃癌。胃カメラで、食道に7cmに広がった癌があると告知された。癌の告知を受けた時は、死の順番が来たと思わされる。紹介された病院で内視鏡手術で完治した。その6年後、胃に三つの初期の癌があると言われ、内視鏡手術で摘出できた。抗癌剤の服用の必要がなかったことは幸いであったと思っている。③ 腰痛。100mも歩けば、痛くて歩けない脊柱管狭窄症になった。4つの整形外科に通ったが治らなかった。腰痛予防のための屈伸運動をして、今は普通に歩ける状態に回復した。幸運に乗り超えてきたが、これらの経験は、私にとって「宝」である。

長年酷使すれば、体は疲労し、病気にもなる。信仰による「平安」は病気を受容させ、うまく付き合う手立てを教えてくれる。また、死後を神に委ねられることはクリスチャンの大いなる「安心」である。最期の時は、延命治療をせず、穏やかに天に送り出してほしいと、妻と息子夫婦に伝えている。